

ベルギーの金融・為替政策と欧州通貨統合 - スネーク制度を中心に -

横浜国立大学大学院 亀卦川 芽以

本報告では、1970年代の欧州通貨統合におけるベルギーの政策(とくに金融・為替政策)に焦点を当て、「スネーク制度」の下で、ベルギーがベネルクス3国、ドイツ、フランスのそれぞれとの関係を保ちつつ、同国が通貨統合実現に向け果たした役割について検討する。なぜなら従来の研究では、大国であるドイツやフランスに焦点が当てられ、ベルギーなどの小国のスタンスが十分に分析されていないので必要であると考えたからである。

本報告では第1に、ブレトンウッズ体制崩壊前後のベルギーの政策について整理する。ベルギーは小国で、かつ貿易依存度が高いのでEC内で積極的な統合推進派であった。特にベルギーはEC(EEC)よりも前にベネルクス3国での統合を進め、スネーク制度の下でも3ヶ国で「トンネルの中のミミズ」と呼ばれる独自、かつ密接な関係を継続した。一方、フランスとは71年に外国為替市場が閉鎖された際、「二重為替相場制」を共に導入することで2ヶ国間の関係を強調している。

第2に、1976年にフランスが再離脱した後、スネーク制度はマルクを中心とした「ミニ・スネーク」になるが、ベルギー・フランは度々投機に直面する。これに対し、ベルギー国立銀行はアンカー通貨であったマルクに追随する政策を行うが、当時のベルギーはインフレと高い失業率に悩まされていたので国内均衡と相反する政策となった。ここでは、「ベルギー・フランはスネークに残留する。」という当局の見解が重要であると考えられる。

第3に、当時のベルギーの首相であったチンデマンスが発表した『チンデマンス・レポート』内容について分析を行い、このレポートの意義を検討する。チンデマンスは、「欧州通貨統合は共同体全体で議論すべきである。」とスネーク制度がドイツ主導型の「マルク圏」であることは問題であり、真の欧州通貨統合ではないことを指摘している。更に、「Two speed system」を導入し、時間の差はあってもECの目標は「統合」であることを提示したことは、欧州通貨統合に重要な役割を果たした。

全体の検証を通じて、本報告ではベルギーの政策が欧州通貨統合実現に向け積極的に力を発揮してきたことについて明確にする。